

研究ノート

小学校教育実習に関する実習校の成績評価と実習生の 自己成績評価の相違に関する検討

松本大輔・川上 貴・佐藤範男・松井克行

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成26年1月9日受理)

A Consideration of Evaluation by Schools with Self-evaluation by Students in Practice Teaching of Elementary School

Daisuke MATSUMOTO and Takashi KAWAKAMI and Norio SATOU and Katsuyuki MATSUI

(Department of Children's, Faculty of Children's Studies, Nishikyusyu University,)

(Accepted January 9, 2014)

研究ノート

小学校教育実習に関する実習校の成績評価と実習生の自己成績評価の相違に関する検討

松本大輔・川上 貴・佐藤範男・松井克行

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成26年1月9日受理)

A Consideration of Evaluation by Schools with Self-evaluation by Students in Practice Teaching of Elementary School

Daisuke MATSUMOTO and Takashi KAWAKAMI and Norio SATOU and Katsuyuki MATSUI

(*Department of Children's, Faculty of Children's Studies, Nishikyusyu University,*)

(Accepted January 9, 2014)

Abstract

The purpose of this study is to consider of Self-evaluation by Students with Evaluation by Schools in Practice Teaching of Elementary School.

As the result the main difference were two points.

- 1) The understanding of the child and management of the class is high evaluation by school.
- 2) The reflection of the class is low evaluation by school.

In this study, It was revealed that it was necessary to educate student teachers' abilities lesson plan and study on teaching materials in future.

Key words : Practice Teaching of Elementary School 小学校教育実習
Evaluation by School 実習校評価
Self-evaluation by Students 自己評価

I. はじめに

現在の多様化・情報化におけるいわゆる知識基盤社会においては、教員養成段階においても、ただ学問的・専門的な知識の習得のみならず、実際に児童に関わりながら、教材研究、授業実践、実践の省察という知識の活用力を伴う実践的な力量の育成が求められているといえよう。こうした中で実際に4週間という期間において小学校現場にて行う教育実習の重要性は、教員養成段階における教師としての実践的力量を身につける重要な役割を担っているといえよう。

ところで、本学の子ども学部では、佐賀市教育委員会と平成23年1月に小学校教育実習の協定を結んだ。この協定により教育実習生は佐賀市内の小学校での教育実習が可能となったのである。このように母校実習ではなく、市教育委員会と協定を結び、市内の小学校にて教育実習を行うということは地方私立大学としてはまだまだ先進的な試みといえるだろう。

しかし、一方で、本来、教育実習に参加するべき能力や意欲のない学生が実習に参加する事による実習公害と言われる問題も叫ばれている。つまり、教育実習に送り出す大学側の実習指導の質的な向上が求められていると言えよう。特に、地域との連携による教員養成を目指し、佐賀市と協定を結んだ本学の子ども学部においては、今後、一層、地域との結びつきを強くしていくために、実習指導の充実及び、実習参加に関する基準の設定と、送り出す実習生の質を高めるような指導を行う必要があるだろう。

そこで本研究では、平成25年6月に行われた小学校教育実習における受け入れ先の実習校に対する成績評価と実習後の実習生の自己成績評価の結果を分析し結果を考察することで、今後の小学校教育実習指導改善への手がかりを得ることを目的とした。

II. 研究方法

1) 調査対象

平成25年6月に佐賀市にて小学校教育実習を行った本学4年生70名(実習生)及び、佐賀市内の小学校教育実習受け入れ先32校(実習校)を対象とした。有効回答数は実習生より63名、実習校より32校、70名分であった。

2) 調査内容

本調査では、実習校においては実習後、実習校から送られてきた実習生の教育実習の成績を判定する成績評価表を用いた。また実習生においては、実習直後、実習生が自ら自身の実習に対して自己評価という形で同じ成績評価表を自己成績評価表として用いた。成績評価表は、「基礎的事項」に関する4項目、「子ども理解及び学級経営」に関する4項目、「教科指導と学習評価」に関する10項目、「教科外の指導」に関する2項目の計20項目で構成されている(成績評価表は資料として付記した)。

3) 分析方法

成績評価表の各20項目は「極めて良好である」を5、「良好である」を4、「基準は満たしている」を3、「やや不十分である」を2、「不十分である」を1と点数化し、統計処理による分析を行った。

III. 結果と考察

1) 平成25年度の実習校の成績評価と実習校の自己成績評価から

表1は実習校の実習生70名分の成績評価と、実習生63名の自己成績評価の評点を評価観点及び合計得点として示したものである。

表1から評価観点の「子ども理解及び学級経営」において有意に実習校側の評価が高い(0.1%水準)。これらは、実習生がこれまでの、幼稚園実習や、保育実習、施設実習などの実習において多くの子どもと接してきた経験が小学校教育実習においても子

表1 平成25年度 実習校の成績評価と実習生の自己成績評価の評価観点及び評点合計について

評価観点	実習校の成績評価の評点	自己成績評価の評点	t 値
基礎的事項 (4項目)	17.7	17.59	0.31
子ども理解 及び学級経営 (4項目)	16.06	14.7	3.91***
教科指導と 学習評価 (10項目)	38.91	37.51	1.48
教科外の指導 (2項目)	7.74	7.48	1.25
合計	80.4	77.3	1.9*

(*p<0.1, ***p<0.001)

もの理解という側面で実習生の自己評価よりも実習校から高く評価されたのではないだろうか。それは「子ども理解及び学級経営」の中でも、「児童の発達に応じて、コミュニケーションや対応ができる」という項目の得点が各項目の中でも一番高く、また実習生の自己評価との相違においても高い水準で有意差が出ている項目であるという事からも理解でき

よう（表2）。

また10%水準ではあるものの、評点合計に対して実習校の評価が実習生の評価よりも有意に高いものとなっている。そして実習校の成績評価の評点合計が80点を越えているという事は、実習生全体の平均評価が「優」であるということである。このことに関しては、平成25年度の実習生に対する評価が高

表2 実習校と実習生の評価分析表

○目標達成状況及び得点について				
5. 極めて良好である	4. 良好である	3. 基準は満たしている	2. やや不十分である	1. 不十分である
○達成目標	実習校 M (SD)	実習生 M (SD)	t 値	
○基礎的事項				
1 教育実習の留意事項を全般的に守ることができる。	4.5 (0.53)	4.56 (0.73)	-0.5	
2 教職に対する使命感や責任感をもって、積極的に取り組むことができる。	4.27 (0.61)	4.24 (0.82)	0.27	
3 実習校教員と適切にコミュニケーションを取り、他の実習生と協力できる。	4.31 (0.52)	4.11 (0.95)	1.54	
4 児童と積極的にかかわろうとすることができる。	4.61 (0.49)	4.68 (0.53)	-0.77	
基礎的事項に関する得点（4～20）合計	17.7 (1.63)	17.59 (2.45)	0.31	
○子ども理解及び学級経営				
1 児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる。	4.27 (0.51)	3.76 (0.75)	4.6***	
2 児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる。	3.84 (0.63)	3.7 (0.81)	1.15	
3 担任教師が示す学級経営案について理解することができる。	4.06 (0.5)	3.71 (0.99)	2.55*	
4 学級経営案の理解に基づき、児童を指導しようとするすることができる。	3.88 (0.55)	3.52 (0.84)	2.96**	
子ども理解及び学級経営に関する得点（4～20）合計	16.06 (1.63)	14.7 (2.34)	3.91***	
○教科指導と学習評価				
◆学習指導の事前学習				
1 課題に応じて、学習指導案を積極的に作成しようとする。	4.2 (0.65)	4 (0.88)	1.5	
2 指導を受け入れ、学習指導案の改善を図ることができる。	4.27 (0.61)	4.19 (0.84)	0.64	
◆学習指導の実施				
3 作成した学習指導案にしたがって、授業を展開することができる。	3.96 (0.55)	3.61 (0.79)	2.88	
4 作成した学習指導案にしたがって、学習評価を実施することができる。	3.48 (0.56)	3.27 (0.9)	1.68**	
5 板書や発言、ノートの指導、あるいは実技指導を適切に行うことができる。	3.61 (0.62)	3.52 (0.93)	0.66	
6 児童の反応に適切に対応しながら、学習指導を行うことができる。	3.77 (0.64)	3.52 (0.93)	1.8	
7 学級経営を意識して、具体的な学習指導を行おうとすることができる。	3.81 (0.46)	3.35 (0.86)	3.93***	
8 必要に応じて、授業記録等を適切に作成することができる。	4.01 (0.67)	3.86 (0.89)	1.15	
◆学習指導の事後学習				
9 反省的考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べるることができる。	3.91 (0.61)	4.22 (0.89)	-2.35*	
10 授業・学習評価の改善について述べたり、レポートを書いたりできる。	3.87 (0.63)	3.95 (0.92)	-0.59	
教科指導と学習評価に関する得点（10～50）合計	38.91 (4.04)	37.51 (6.73)	1.48	
○教科外の指導				
1 教科外活動の目標や内容について理解する。	3.94 (0.48)	3.78 (0.81)	1.44	
2 教科外活動のいずれかにおいて学習指導案を作成し指導することができる。	3.8 (0.56)	3.7 (0.87)	0.8	
教科外の指導に関する得点（2～10）合計	7.74 (0.93)	7.48 (1.49)	1.25	
評点合計				
秀 (90点以上) 優 (89～80点) 良 (79～70点) 可 (69～60点) 不可 (60点未満)	80.4 (6.94)	77.3 (11.3)	1.9*	

(*p<0.1, *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001)

いということを表していると考えられる。それらは評価観点の及び合計得点においても実習校の成績評価の方が実習生の自己評価よりも評点が高いことからわかる。さらに20項目ごとに評点をまとめ分析したのが表2である。

表2から有意差が出た項目は、「子ども理解及び学級経営」に関する4項目から「児童の発達段階に応じてコミュニケーションや対応ができる」、「担任教師が示す学級経営案について理解する事ができる」、「学級経営案の理解に基づき、児童を指導しようとする事ができる」の3項目、「教科指導と学習評価」に関する10項目から「作成した指導案にしたがって学習評価を実施できる」、「学級経営意識して、具体的な学習指導を行おうとすることができる」、「反省的な考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べる事ができる」の3項目の合計6項目である。この中で、「反省的な考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べる事ができる」以外の5項目においては、実習校の成績評価の評点の方が実習生の自己成績評価の評点よりも有意に高く、実習生自身の評価よりも、実習校が高く評価している項目であるといえる。

「子ども理解及び学級経営」に関する評価観点においては4項目中3項目において実習校側が有意に高い評点を付けていることは先述したが、これまでの実習から多くの子どものと接してきた経験が小学校教育実習においても子どもの理解という側面、学級理解という側面に活かされ、実習校側からの高い評価となったのではないかと考えられる。

一方で「反省的な考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べる事ができる」の項目のみが、実習校の成績評価の評点の方が実習生の自己成績評価の評点よりも有意に低い項目である。さらに実習生の自己成績評価においては4点を超える高得点項目である。これは、実習生と実習校側における、授業の見方や、授業に対する反省、またそれをどのように活かすかという省察の部分の質的な差異であると考えられる。これらの省察力は、教材研究、授業実践、実践の省察という知識の活用力を伴う実践的な力量に寄与する重要な力であると考えられる。小学校教育実習指導においても、模擬授業後の省察レポートの提出や、模擬授業参観者の授業参観レポートを、模擬授業演習の度に書かせ提出させてきたが、ただ形式的にレポートさせ提出させるのではなく、その内容を今後質的に高める指導を行う必要があるといえよう。

また表2からは、実習校の成績評価及び実習生の自己成績評価としては、「基礎的事項」に関する項目の評点が高いことも伺える。これらは、小学校教育実習に関して実習生自身が高い意欲や緊張感をもって取り組んでいたと考えられよう。その一方で、「教科指導と学習評価」に関する項目の評点が他の評価観点の項目に比べ実習校の成績評価、実習生の自己成績評価ともに低いことも読み取れよう。これらは、実習生が授業展開や授業中での児童の指導、学習評価等の授業に関する内容が課題であると捉えており、実習校側からも課題として捉えられている観点ではないかと考えられる。特に学習評価に関する項目は、実習校、実習生ともに全項目の中で評点が最も低い項目となっている。指導と内容と評価の一体化という授業づくりの基本から考えれば、これらは単なる学習評価独自の問題としてではなく、教材研究や学習指導案作成等の授業づくりの中での問題として捉え、今後の小学校教育実習指導の中で指導内容として検討していく課題であろう。

これまでの表1及び表2から、平成25年度の小学校教育実習においては、「子ども理解及び学級経営」等に関しては実習校側からの評価が実習生自身よりも有意に高い評価であること。また評価観点の評点、各評価項目、評点合計ともほとんどが実習生の自己成績評価よりも実習校の成績評価が高いということ、さらに合計評点の平均が80点（優）を越える得点であるという事を鑑みれば、平成25年度の小学校教育実習に関しては、実習校側からの評価としては高評価であったと考えられる。一方で省察力に関する項目においては実習生の自己成績評価の得点よりも実習校側からは低い評価であるということが読み取れた。また「教科指導と学習評価」に関する項目の評点が他の評価観点の項目に比べ実習校の成績表、実習生の自己成績評価ともに低いことも読み取れた。これらを踏まえ実習校側が高く評価をしている部分は今後も大切にしながら、省察力等を含む授業力に関する力を身につけさせていく事が重要であると考えられる。

2) 平成24年度の実習校の成績評価と実習校の自己成績評価と平成25年度の実習校の成績評価と実習校の自己成績評価から

表3は平成24年度と25年度の実習校の成績評価における評価観点と合計評点の比較である。

表3からは有意差は認められなかったものの平成

表3 平成24年度と25年度の実習校の成績評価比較

評価観点	平成24年度実習校の成績評価の評点	平成25年度実習校の成績評価の評点
基礎的事項 (4項目)	17.1	17.7
子ども理解及び 学級経営 (4項目)	15.72	16.06
教科指導と 学習評価 (10項目)	38.4	38.91
教科外の指導 (2項目)	7.56	7.74
合計	78.77	80.4

表4 平成24年度と25年度の実習生の自己成績評価比較

評価観点	平成24年度自己 成績評価の評点	平成25年度自己 成績評価の評点
基礎的事項 (4項目)	17.83	17.59
子ども理解及び 学級経営 (4項目)	15.02	14.7
教科指導と 学習評価 (10項目)	36.5	37.51
教科外の指導 (2項目)	8.17	7.48
合計	77.52	77.3

25年度の実習校の成績評価の評点の方が評価観点、合計評点ともに僅かながら高いことが伺える。また表4は平成24年度と25年度の実習生の自己成績評価における評価観点と合計評点の比較である。

表4からは、有意差は認められなかったが平成25年度の実習生の自己成績評価の評点の方が評価観点、合計評点ともに僅かながら低いことが伺える。しかし、表3及び表4からは実習校の成績評価、実習生の自己成績評価ともにほとんど変化がないといえよう。また平成24年度、平成25年度との間で、実習校の成績評価と実習生の自己成績評価との評価関係もほとんど変わっていないといえよう。

小学校教育実習指導においては平成25年度の小学校教育実習生に対しては、平成24年度の小学校教育実習生における小学校教育実習指導よりも、より模擬授業演習の中で、教材研究や学習指導案づくりの時間を設けた。具体的には、国語研究班、算数研究班、理科研究班、社会研究班とグループを分け、各教科について教材研究を深め、実際に授業を行った。

また授業後は授業協議会と称して、授業や教材について議論をする場を設定した。さらにその授業協議会での反省を踏まえ、再度指導案を練り直し、再び授業を行うこととした。このようにただ授業を行うだけでなく、小学校6年間のカリキュラムを見通した授業づくりや教材作りをよりじっくりと行う時間を設けた。実習校の成績評価が評価観点、合計評点ともに僅かながら高いとはいえるが、これらの成果が平成24年度と平成25年度の実習校の成績評価、実習生の自己成績評価の比較からは読み取ることができなかったという結果になった。これらは実習生の質の差異や、実習校における指導教員の評価基準に対する捉え方の差異等の問題として考えられ、一律な量的分析からは考察する事が難しい問題と考えられよう。今後、より詳細な分析やインタビュー及び記述等の質的な研究と併せて行う事で、小学校教育実習指導の指導内容の成果を考察する事が可能になると考えられる。ただ、実習校の成績評価の評点からは平成24年度、平成25年度ともに、「教科指導と学習評価」観点の項目の評点が他の項目に比べ低いことから、今後も、小学校教育実習指導の中で、指導案作成、教材研究等の授業計画力や実際の授業場面での指導力の向上をこれまで以上に取り組んでいく必要があると考えられる。

IV. おわりに

本研究では、平成25年6月に行われた小学校教育実習における受け入れ先の実習校に対しての成績評価と実習後の実習生の自己成績評価の結果を分析し考察することで、今後の小学校教育実習指導改善への手がかりを得ることを目的とした。

その中で、「子ども理解及び学級経営」等に関しては実習校側からの評価が実習生自身よりも高い評価であること。また評価観点の評点、各評価項目、評点合計ともほとんどが実習生の自己成績評価よりも実習校の成績評価が高いということ、さらに合計評点の平均が80点（優）を越える得点であるという事を鑑みれば、平成25年度の小学校教育実習に関しては、実習校側からの評価としては高評価であったと考えられる。

一方で省察力に関する項目においては実習生の自己成績評価の得点よりも実習校側からは低い評価であるということが読み取れた。また「教科指導と学習評価」に関する項目の評点が他の評価観点の項目

に比べ実習校の成績表、実習生の自己成績評価ともに低いことも読み取れた。今後も省察力等を含む授業力に関する力を身につけさせていく事が重要であると考えられる。

さらに平成24年度の小学校教育実習における受け入れ先の実習校に対しての成績評価と実習後の実習生の自己成績評価の結果の比較からは、平成24年度と平成25年度との間に、大きな変化は見られなかったが、実習校の成績評価の評点からは平成24年度、平成25年度ともに、「教科指導と学習評価」観点の項目の評点が他の項目に比べ低いことから、今後も、小学校教育実習指導の中で、指導案作成、教材研究等の授業計画力や実際の授業場面での指導力の向上をこれまで以上に取り組んでいく必要があると考えられる。

本研究は継続的に行う事により意味のある研究であると考えられる。次年度以降においても教育実習後の評価の相違を分析する事で実習校が求める小学校教育実習生としての力量を小学校教育実習指導の中で育成するような小学校教育実習指導の指導内容を検討する事が可能になると考えられる。そのためにも、継続的に基礎的なデータを蓄積する事、分析されたデータと小学校教育実習指導の指導内容の成果と課題をより詳細に考察ができる調査内容を検討する事が今後の課題であると考えられる。

資料 成績評価表

○目標達成状況及び得点について		
以下に記す目標達成の状況に応じて、5～1のいずれかに○を付す。その後、各項目の得点を合計し、「合計」欄に合計点を記入する。		
・5点（極めて良好）・4点（良好） ・3点（基準は満たしている）・2点（やや不十分）・1点（不十分）		
○基礎的事項		達成状況
1	教育実習の留意事項を全般的に守ることができる。	5・4・3・2・1
2	教職に対する使命感や責任感をもって、積極的に取り組むことができる。	5・4・3・2・1
3	実習校教員と適切にコミュニケーションを取り、他の実習生と協力できる。	5・4・3・2・1
4	児童と積極的にかかわることができる。	5・4・3・2・1
基礎的事項に関する得点（4～20）		合計 点
○子ども理解及び学級経営		
1	児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる。	5・4・3・2・1
2	児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる。	5・4・3・2・1
3	担任教師が示す学級経営案について理解することができる。	5・4・3・2・1
4	学級経営案の理解に基づき、児童を指導することができる。	5・4・3・2・1
子ども理解及び学級経営に関する得点（4～20）		合計 点
○教科指導		達成状況
◆学習指導の事前学習		
1	課題に応じて、学習指導案を積極的に作成しようとする。	5・4・3・2・1
2	指導を受け入れ、学習指導案の改善を図ることができる。	5・4・3・2・1
◆学習指導の実施		
3	作成した学習指導案にしたがって、授業を展開することができる。	5・4・3・2・1
4	作成した学習指導案の評価項目にしたがって、学習評価に取りくむことができる。	5・4・3・2・1
5	板書や発言、ノートの指導、あるいは実技指導を適切に行うことができる。	5・4・3・2・1
6	児童の反応に適切に対応しながら、学習指導を行うことができる。	5・4・3・2・1
7	学級経営を意識して、具体的な学習指導を行おうとすることができる。	5・4・3・2・1
8	必要に応じて、授業記録等を適切に作成することができる。	5・4・3・2・1
◆学習指導の事後学習		
9	反省的考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べるすることができる。	5・4・3・2・1
10	授業を振り返り、改善点について述べたり、レポートを書くことができる。	5・4・3・2・1
教科指導と学習評価に関する得点（10～50）		合計 点
○教科外の指導		
1	教科外活動の目標や内容について理解する。	5・4・3・2・1
2	教科外活動のいずれかにおいて学習指導案を作成し指導をすることができる。	5・4・3・2・1
教科外の指導に関する得点（2～10）		合計 点